ICT 海外ボランティア会会報

No. 29

2012 年 1 月 10 日（火）

Home page　：http://www.ictov.jp/
e-mail　　：sv@info.nttob.org

目次

◆ 巻頭言
ICT 海外ボランティア会への期待
日比谷同友会会長　鈴木　正誠　氏
◆ 特別寄稿
仕事は自分で作るもの(真藤語録から、その 4)
本会顧問　　石井　孝　　氏
◆ 新年寄稿
アマリアのマリアへ花束を
田上インターナショナル代表　田上　智　氏
◆ 会員リレー寄稿（第 14 回）
南太平洋島国滞在記
SV（バヌアツテレビラジオ放送局、2009.3-2010.9）
江上　俊一郎　氏
◆ 現地たより
モンゴル便り（3、最終）
SV（モンゴル）　野村　徹　氏

巻頭言

ICT 海外ボランティア会への期待

日比谷同友会会長
元ＮＴＴコミュニケーションズ代表取締役社長　　鈴木　正誠

働く場を考えるにあたって多くの場合は会社選びということになろうが、これからの社会はどうなっていくのか、自分に何ができるか、貢献できる世界はどこにあるか、を判断していかねばならない。同時に、これらを従来と異なった視点から機会を探ることが大切である。まず、働くところを日本に限定することはない。多くの企業が縮小する国内市場に限界を感じて海外進出が生き残りのカギとしているし、市場のグローバル化を受けて世界中の企業が意欲と性能のある者を求めている。新しいビジネスモデルが既存の企業の枠外で若者の感性と技術によって創出されるケースも多い。SNS, ゲームソフト、新アプリなどインターネットにかかわる事業は特にそうだ。他にも斬新な問題意識を持ったNPOやボランティア活動の中からも明日の事業の芽を感じさせるものがある。

これは先日大学関係者に向けた教育と就職に関する私の提言の一部である。これを書いていて学生に語りかけるつもりだったが、リタィアーして第二の人生を歩もうとしている熟年、高年層も同じなのではないかと感じた。社会に巣立ちをしようとしている若者とひと仕事を終えてさらに新しい生きがいの場を求めようとする中高年との間に本質的に異なるものは皆が考えるほど大きくはないように思う。

反論が予想される。体力、気力、夢、期待、責任感、探究心等々あれをとってもこれをとっても、高齢になるにつれて衰えてくるではないか。本当にそうだろうか。私の考えは、若者は意欲と生気に満ちた若者に囲まれ（中にはそうでないものもいるが）学校、社会、家庭から適度のストレスを与えられている。リタィアーするとその人を取り巻く人間の数が減り、世の中とのかかわり方も一変し新しいつながりを作るのは容易でない。ここに衰えの原因がある。衰えるように仕向けられているわけで、なおさら悪いことにはこの被害者が他人を衰えさせる加害者に転じるという伝染メカニズムとして広がっている。

仲間の存在が活力維持の第一条件だと思う。今やインターネット上でのSNSが大盛況で趣味の会、商品の宣伝から専門家の人脈形成、政治体制の変革運動まで人と人とを結びつけ影響を与え協力しあっている。これは既に社会を変えるエンジンである。やがて高齢者が参加しリードするSNSが広がっていくことを期待しているが、問題はツールそれ自体よりも、その背景にある仲間作りによって得られるものが非常に大きいことの理解とそれを実行する情熱を持つことである。このような活動に日比谷同友会として一歩踏み出せないかと考えて、会員がこの指とまれ方式であることに共鳴した人たちが交流の場をもうけることを何とかサポートしていくことはできないかといろいろ工夫している。結果はこれからである。

この中で私はICT海外ボランティア会の組織、活動そしてメンバーの高い参加意識に注目している。もともと電電公社からNTTの初期にかけて海外協力を柱として、東南アジア、ア

ラブ諸国、中南米と広く電気通信インフラの建設に多くの専門家が携わって、目覚ましい成果を上げ現地の政府や国民から感謝されてきた。その後これらの多くの国は経済力を飛躍的に成長させると同時に通信の目覚ましい技術改革により自力で通信システムを築く能力をつけてきたし世界の民間企業が投資活動の対象として進出するようになって大きく様変わりした。しかし､今や世界の人口は 70 億人に達し勢いは止まらないし、経済成長から取り残されている国や地域はむしろ拡大している。助けと援助を求める声は我々のところに届かないところで以前より大きくなっているはずである。これに応えようと経験のある専門技術者の方々が使命感を奮い立たせて新しい地域に新しい技術で貢献しているのが ICT 海外ボランティア会であると理解している。少なくともこの意気込みを共有する集団の熱気が伝染性を持ったものであればなお期待が持てる。

一つのビジネスモデルは時代とともに退化していくが、新しい時代は新しいニーズと新しい働きを求めてくる。若者や学生に勧めることは同時代に生きるシニア層にも当てはまるはずである。新しい可能性を追求して止まないこの会が模範となることを心から願いたい。

特別寄稿

仕事は自分で作るもの（真藤語録からその４）

本会顧問　石井　孝

【元 NTT 社長 真藤 恒氏の語録】

意思決定は最高責任者がして、あとの者は黙ってついていけばいいとか、ひたすら上司の言うことを聞いておけばいいとか、それはとんでもないことで、そうなったら組織の弊害が極端に出るだけで、すべておしまいである。

経営者側はもちろん意思決定しなければならないが、その道程のとり方が重要である。目標というのは一つの方向に沿ったマイル・ストーンにすぎないのだから、多人数がやる気になって初めて、多人数の努力の集積で実現されるものである。極端にいうとある目標が出来上がった場合に、工場長なり、製造部長なりが、自分の考えを出して、自分が達成したんだと威張るようなムードになるやり方でないと、企業というものの目標は達成できるものではない。

エリートの学校をエリートな成績で出てきても、それはほとんど教育ママと先生が世話を焼きすぎているだけで、ただ習ったことを暗記しただけで、その知識は単なる記憶にすぎない。その調子で世の中を渡れると思っていたらとんでもない間違いだ。それは捨てて、とにかく現実の毎日の仕事の上で、自分で考えることである。だれも教えてはくれない。自分の仕事は自分で作っていく、自分の運命は自分で開拓していくという態度にならないとだめである。

これは新入社員が入ったときに言っていることである。

学校教育は、高等学校でも大学でも、少なくとも最終学校で、社会に出る人のために、自分で自分の仕事を作って、自分でそれをまとめてみるという一つの修練をさせるべきである。

真藤さんの人事評価は、はたから見ると、学歴やどこの大学出かなどについては全く無関心のようであった。この語録のように、自主的に責任をもって仕事に取り組み、成果をあげたかどうかの一点で人をみていたように思える。

電電のような官庁の流れをくむ組織では、俗に言うキャリア、ノンキャリア、キャリアの中でもどこの大学をでたかが人事システムの中に組み込まれ、社員はそれが当たり前のこととして受け止めていた。

電電の採用試験にパスし、郵政省出身の先生に相談すると、君は新制出だから課長まで行けば御の字だと思いなさい。しかし、定年後の年金などは保証されているから、行ったらどうかと言われた。入社後の人事も、そんなものかと特に違和感はなかった。

また、電電ではキャリアは２乃至３年で転勤し昇任してゆくが、ノンキャリアは長期間に亘って一つの職務に止まり、実質的な仕事の主人公として会社を支えていた。いわゆる、縁の下の力持ちである。これを皆当然と思っていた。

真藤さんはこのノンキャリアに光をあてるとともに、キャリアについても、たとえ新制出であっても仕事さえ優れていればためらいなく課長職以上のポストを与えた。これには当初吃驚したが、評価された者は喜び、ひときわモチベーションが上がった。

この当然といえば当然の評価システムが十分定着する前に真藤さんが退かれたため、振り子がまた逆振れしたようだ。組織風土の改革は、本当に一朝一夕にしてできるものではない。

新年寄稿

アマリアのマリアに花束を

田上インターナショナル代表　田上　智

「11 月 17 日革命組織から NTT プロジェクトマネージャー・タガミと N 商社アテネ事務所長に宛て殺人予告が出ていますので警告します」。在ギリシャ日本大使館からの一つの通告が来ていた。これから果たしてプロジェクトを続けるのか、中止か私は迷った。ギリシャに携帯電話を導入してから NTT の信用は高まり、OTE（ギリシャ電電公社）のなかでもシンパも増えた代わりに NTT が OTE を買収するのではないかとのうわさも俄かに高まり始めた矢先の出来事であった。買収？そうではない。正確に言えば民営化に伴う投資がメインで経営陣に NTT から人を派遣するかどうかは、そう大きな問題ではなかった。ミツォタキス政権になって各公社の民営化の動きも出てきて、何と言ってもギリシャの財政再建に外国からの資金導入はどうしても必要であった。大蔵次官が是非お話したいと言って、パルテノン神殿を望むディオニソスという名の最高級レストランで「民営化に協力してほしい」と熱っぽく語られたのはつい２か月前のことだった。

NTT の中では、議論が真っ二つに分かれた。プロジェクトの中止という者と「殺人予告」は「男の勲章」是非続けるべきだと。私は後者を選んだ。

プロジェクトの発端はこうだ。当時の NTT 社長が欧州アドバイザリーボード・座長を通し

てギリシャ首相ミツォタキス氏から是非「EC に対抗出来る電気通信の顧問を NTT から派遣してほしい」との依頼があったためである。いかにも漠とした要求であった。初めに事の真意を確かめるべく、1 週間という短い期間のプロジェクトチームを組んで 3 ヵ年の電話網拡充計画なるものを作り、プレゼンしてさっさと引き揚げるつもりであった。ところがである。プレゼンが終わった途端、OTE 総裁、会長、運輸通信大臣 3 者に取り囲まれ、「引き続きこれから本格的で詳細な電話網拡充計画を作成するため再びギリシャに来てほしい」と迫ってきたのだ。「本社に戻って上司と相談する」とその場は切り抜けたが、まあこっちにどうぞと引き込まれ隣に部屋に通された。途端にプロジェクトの面々が「うわあっ」と驚きの声。報告書を書くべく相手になってくれた部長や課長連中の面々がにこにこしながら拍手して待っていたのだ。テーブルの上には焼き鳥の山、チャンタリをはじめギリシャワインがずらり。これはやられた。これが、そもそもの始まりであった。

電話網拡充計画の作成のため１年半のプロジェクトが終わると、これも「敵は本能寺」で、欧州方式（GSM）の携帯電話を入れるべく国際入札のコーディネーターをよこしてくれという要求。その当時、ポルトガルとギリシャだけが携帯電話の導入が遅れていたのだ。早速、海外経験の豊富な無線屋さんの H 氏を投入。見事大役をこなし、NTT の手でギリシャに携帯電話が導入された。さて、ドラマはそれからである。民営化は財政再建の名のもとに鼓動を打ち始めた。引き続き私がその担当になったが、これからは投資という観点からギリシャという国に真正面から向かい合ったのだ。民営化のための投資が買収の脅威を生じさせ、愛国者集団を刺激、そこで「殺人予告」という冒頭の文章につながるのである。

一方で、プロジェクトが始まってから既に２か年経過し、すっかりギリシャの国にも人々にも慣れていた。定宿はシンタグマ広場から目と鼻の先の「アマリア」。ドイツから来た王女の名を付けたそのホテルは中級。市のど真ん中だから便利この上ない。長いプロジェクトを成功させる秘訣の一つは居心地の良い合理的な値段の定宿を見つけること。プロジェクト・マネージャーの心得の一つである。プロジェクトのあり方として契約交渉がまとまるまでは最高級ホテルに滞在、調印した途端にランクを落とすのが常識だ。ギリシャの場合は、グランド・ブルターニュやメレディアンに始まり落ち着き先がこのアマリアだった。

プロジェクトのメンバーに明かさなかった選択の最大の理由の一つは「フロントの美女」だった。名前はマリア。いつしか私の心の中にそのビーナスに花束を贈ろうという気が芽生え始めた。真っ赤なバラの花束を！「アマリアのマリアに花束を」それが、長くてつらいプロジェクト運営を支える心のなかのたった一本の杖のようなキーワードとなった。背は高い。おそらく 180 センチ近い。特徴的なのはその鼻梁の高いビーナスそのものの高慢な顔立ちである。ホテルの宿泊客と早口の英語でよく言い争っていたのを思い出す。

ギリシャ女性の美しさはいまさらでもないが、少年も実に扇情的である。プロジェクトの合間にメンバーこぞって遺跡を見て回ったが、アテネの街を歩くとギリシャ彫刻から抜け出たような美少年にでくわすことがある。ドイツの作家トーマス・マンは休暇で訪れたベニスでギリシャ風の美少年に出会い「ベニスに死す」を著した。最近出版された圓子修平の訳文（集英社文庫）が実に詩的で出来が良いのでここに紹介する。「アシェンバハは驚嘆しながら、この少年の完璧な美しさに気付いた。蒼白く優雅にうちとけない顔は蜂蜜色の髪にとりかこまれ、鼻は額からまっすぐに通り、口元は愛らしく、やさしい神々しい真面目さがあ

って、ギリシャ芸術最盛期の彫刻作品を想わせたし、しかも形式の完璧にもかかわらず、そこには強く個性的な魅力もあって、アシェンバハは自然の世界にも芸術の世界にもこれほど成功した作品は見たことがないと思ったほどであった」。

プロジェクトも終わりに近づき、「アマリアのマリアに花束を」の決行の時が迫っていた。

私は考えた。花束は一瞬で終わる。そうだそれより写真を残そう。ある日、ビーナスに近づいて聞いた。「元気かい？英語がうまいけどどこで習ったの？」いつものようにきっとした顔で「学校で」。私は少し語調をかえて、「写真を撮りたいんだけど、君はきれいだ」。すると想定外のことが起きた。はにかむように下を向き、大理石のような真っ白い顔の皮膚が一気にロージー・ピンクに変わったのだ。バシ、バシとシャッターを押し続けた。

その後政権が代わり、民営化問題も立ち消えとなり、革命組織からの脅威も無くなった。17 年の時が流れ、EC が EU に拡大、現地通貨ドラクマが共通通貨のユーロになったが、変わらないものは政府の財政状態。いや、それもますます悪化した。いまや、崖っぷちといってもいいところまで追い込まれている。国民は政府の緊縮政策に反発、連日のようにアマリアホテル付近のシンタグマ広場でデモが繰り返されている。陽気なギリシャ人も深刻に国の行方を心配するようになったようだが、あの「アマリアのマリア」は今どうしているだろうか？

（了）

会員リレー寄稿 第１４回

南太平洋島国滞在記

SV（バヌアツテレビラジオ放送局、2009.3-2010.9）

江上俊一郎

私は SV として 2009 年 3 月から 1 年半南太平洋のバヌアツ(Vanuatu)の放送局へ滞在し，テクニシャンのトレーニングなどを行ってきました。私の経験が参考になるかもしれないということで帰国後の報告を書くことにしました。滞在中の報告は 2010 年 3 月会報 15 号にしています。

南太平洋の独立国ﾊﾞﾇｱﾂ

１．ﾊﾞﾇｱﾂについて

ﾊﾞﾇｱﾂは 1980 年に英仏領から独立した南太平洋の若い独立国でニューカレドニアの近くにあります。人口は 24 万人、その 90%以上がメラネシア人です。メラネシア人とはパプアニューギニア(PNG)、ソロモン諸島、ニューカレドニ

JV の山口さんとﾎｰﾑｽﾃｲしたﾏﾚｸﾗ島の家

ア、バヌアツ、フィジーなどメラネシアと呼ばれる島々に住んでいる原住民のことです。バヌアツの住民が外国へ行って初めてアフリカの黒人を見た時，自分達より黒い人がいるといって驚いたという話がありますから、メラネシア人はアフリカ人ほど黒くはありません。顔にはいくつかの典型的なパターンがありますが色さえ黒くなければ西欧人と変わらないような顔立ちの人たちもいます。右の写真は現地訓練でホームステイしたマレクラ島の家族でバヌアツ人とはこのような人たちです。家の周りはココナツのプランテーションで１時間位歩いたところにあるガーデンでいもを栽培し、自給自足の生活をしています。皆、敬虔なクリスチャンで休みには教会へ出かけます。

ﾊﾞﾇｱﾂﾃﾚﾋﾞﾗｼﾞｵ放送局(VBTC)の局舎

　メラネシア人の国の間では連帯感があり、バヌアツの新聞はPNGの領土問題ではインドネシアを非難しています。また、本部がフィジーにあるUniversity of South Pacificは分校がメラネシアの各島にあり、共通の入学試験によってメラネシア人の秀才を選抜し、大学教育を施しています、

TV2chとFM7chのｱﾝﾃﾅ(ｴﾌｱﾝﾃ)

２．バヌアツテレビラジオ放送局

　バヌアツテレビラジオ放送局(VBTC)の年間予算は約１億円で政府がその半分を負担し、あと半分はTVｺﾏｰｼｬﾙやBBC、 ABC、CCTV(ChinaCentralTV) 等の受託放送などの収入に頼っています。放送局は独立後の1982年にオーストラリアの援助で建設され、ラジオ放送についてはオーストラリアが、TV放送についてはフランスが援助しています。TV放送機器のディジタル化への対応は終わっておりいつでもディジタルTV放送の開始は可能となっていました。TV関係はフランスの放送局で働き、現在はニューカレドニアに住んでいるコンサルタントが時々来て面倒を見ています。ラジオ放送についてはオーストラリアのAusaidから元ABC放送局長のMr.マンガイが短波放送再開の責任者として派遣されていました。私はMr.マンガイからVBTCの経営状態など多くのことを教えてもらいました。

　設備の仕様書やマニュアルなどのドキュメントが全く存在しないのでまずドキュメントを残すことを目標にして，各システムのドキュメントを作り，テクニシャンの訓練を行いました。数学から回路までテキストを作って教えましたが効果があったかどうかはわかりません。

中国の衛星受信ｱﾝﾃﾅ(TV&FMﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ受信)

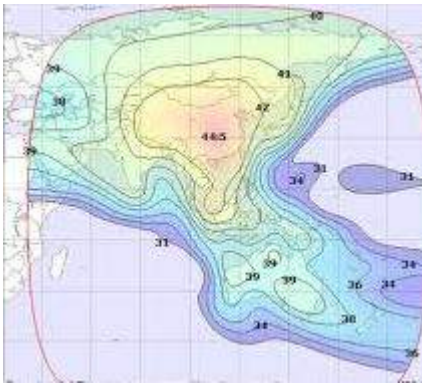
懸案の短波放送はAusaidが米国EnergyOnix社から購入した短波送信機が納入はされたものの未完成で使えず結局再開はできませんでした。開発が終わっていない装置を売るなど米国の製造業はひどいことをするものです。

３．中国の進出

ホームステイしたとき、毎日ラジオオーストラリアの短波放送を聞いていましたがその放送の中でオーストラリアの今後10年の軍事予算が決まった話があって、その目的は南太平洋への中国の進出に対抗するためだといっていました。

バヌアツではエファテ、サント、マレクラの３島で中国のCCTV9(英語TV)とRadio China International(英語FM) を衛星から受信し、タワーから地上TV及びFM放送として再放送しています、首都のあるエファテのタワーから放送しているTV2ch, FM7chのうち, TVとFMの各1chは中国からの放送です. 特にマレクラではバヌアツ放送がないので毎日中国の国際放送を見ていることになります。独立国の放送としてこれは大変なことだと思っていましたが実際にCCTV9を見続けると簡潔で宣伝臭は少なく良くできていると思いました。島民からも中断していたサントのCCTV9を早く再開するよう頼まれました。

CCTV9はChinasat6Bという欧州製の大型衛星で配信されています。中にはTV 162チャネル、ラジオ約100チャネルを右のカバレッジで国内外に放送しています。このカバレッジを見ると中国の意図がなんとなくわかるのではないでしょうか。



通信衛星Chinasat6Bのｶﾊﾞﾚｯｼﾞ

４．宣教師の貢献

J.ミッチナーのTales of South Pacificによるとバヌアツ人は最初に来た宣教師をローストして食べたそうである. それにもめげず布教した宣教師がこの国に果たした役割は大きく、バヌアツ人による独立国を可能にしたのは宣教師による英才教育ではないかと思われる. 宣教師による全寮制の英才教育は日本では鹿児島のラサールが有名ですがバヌアツでもオネセア高校という全寮制で中学を1番か2番ででた学生だけを教育する学校がありました。その学校を出て牧師になった人たちがこの国の独立に貢献しています。佐野SVの紹介でプレスビテリアン教会の礼拝に参加しオネセア高校出身の セシー牧師に会いました. セシー牧師は独立の経緯を書いたMy Lifeという自伝を出版していますが日本であれば出版文化賞をもらえるような本でした。

５．美しい島

北にあるサント島は太平洋戦争中

米軍の基地があったところでミュージカル南太平洋の舞台でもあります。私もBBCとフランスのFM放送再開のため2回出張し、アンテナのある台地まで上りましたが雰囲気がのどかで本当に美しい島だと思いました。もう一度行くとしたらサントへ行きたいものです。この国が独立したのもサントの土地をアメリカ人に分譲しようとしたことが原因のひとつだったらしいのですがそれは理解できることだと思いました。

ﾐｭｰｼﾞｶﾙ南太平洋の島ｻﾝﾄの美しい風景

６．日本人の痕跡

戦前には近くのニューカレドニアのニッケル鉱山で2~3,000人の日本人が働いていましたが開戦と同時に全員豪州の収容所へ送られたそうです。戦後は漁業や畜産でかなりの日本人がバヌアツに来たらしいのですが今は少なくなって在住日本人は両手で数えられるほどです．日本人の痕跡は過去に東急グループの所有であったルラゴンホテルのゴルフコースや現在のバヌアツの首相が日本人の子孫サトーキルマン氏であることなどに残っています。

我々が居たエファテにはタカラ温泉という温泉があり，名前から日本人が見つけたのではないかと思えましたが確かなことはわかりませんでした．背が立つほど深いプールのような温泉で行く前に電話しておくとお湯を一杯ためておいてくれます．写真は座っているのではなく全員たっています。

日本人が見つけたと思われるﾀｶﾗ温泉

７．最後に

苦労もありましたがボランティアに参加して良かったと思っています．

e-mail:egami@ieee.org

現地たより

モンゴル便り（3、最終）ウランバートルの顔

SV（モンゴル）　野村　徹

１．ウランバートルの表の顔

SV生活も残り少なくなりました。雑誌「地球の歩き方」にはその国を訪問しょうとする人に地図や観光スポット、などを紹介しています。

「地球の歩き方」モンゴル版もそれにならい様々な情報が掲載されていて、「モンゴルの町」が紹介されています。

ウランバートルでは第１に紹介されるのがウランバートルの町の中心にある「スフバートル広場」です。この名はモンゴルの革命の指導者で国の英雄として敬愛されている「スフバートル」からとられています。（写真１）この写真の右端に馬に乗った銅像が見えますがそれがスルバートルで正面は国会議事堂です。

モンゴルはチベット仏教が浸透している国で各所に仏教寺院がありますが有名なのがウランバートルにある「ガンダン寺」です。この写真も必ず掲載されています。（写真２）

写真１

写真２

２．ウランバートルの真の顔

さて、これから紹介する写真はウランバートルの観光名所の中には登場しませんが、ウランバートルに住んでいると必ず見る風景です。

世界で最も寒い都市・ウランバートルはマイナス３０度以上になるので９月１５日から翌年の６月１５日まで各家庭には温水による暖房が始まりますが、その暖房が来ない家があります。

そこはゲル地区と呼ばれ低所得者が集まっている所だそうです。（写真３・４）それまで多くの援助を受けていたロシアの社会主義体制が崩壊するとモンゴルは今までの生活を失い、遊牧で暮らせなくなった多くの人達がウランバートルに押し寄せ、テント小屋（ゲル）を建て始めたのです。

夏はともかく冬の寒さをしのぐために彼等は石炭を燃やして暖をとりますが石炭も買えないと古タイヤを燃やします。モンゴルの極寒の空はその煙を吸い上げる事が出来ず上空に淀みます。

晴れていても曇った様な空、鼻をつく古タイヤを燃やす臭いウランバートルで２年を過すJOCV や SV は必ずこの恩恵？に浴します。喉が痛くなる経験をして、初めてモンゴルになじめるのかも知れません。

写真３

写真４

JICA「メールマガジン配信登録」のおすすめ

事務局

当会顧問・JICA 青年海外協力隊事務局募集課長 佐藤　睦氏からのおすすめです。SV および JOCV 募集案内等情報満載の「メールマガジン配信登録」をしてください。きっと皆様のお役に立つと思われます。

手順は次の通りです。

① Internet Explore で「JICA」を検索
② 「JICA-国際協力機構」を選択し HP を開く
③ 右手の JICA ボランテイアをクリック
④ 情報満載メールマガジンをクリック
⑤ メールマガジン配信登録をクリック
⑥ 所定の個人情報を記入

- (http://www.jica.go.jp/volunteer/index.hotmail)

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集部　加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) ,または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

総編集長　：ICT 海外ボランティア会　事務局長　加藤　隆
編集長　：ICT 海外ボランティア会　報道部長　　村上勝臣
発行　　：　ICT 海外ボランティア会　（メール：sv@info.nttob.org/）